



—四国横断自動車道建設に伴う—

埋蔵文化財・史跡分布調査報告書

(高知県文化財調査報告書 第23集)

昭和54年3月

高知県教育委員会

例　　言

1. 四国横断自動車道川之江、大豊間建設に伴う埋蔵文化財及び史跡の分布調査報告書である。
2. 調査地区は次の路線についてである。

名　称　四国横断自動車道

区　域　大豊町笠ヶ峯頂上一大豊町川口南

延　長　13km

3. 調査期間

昭和53年12月25日～27日

4. 遺跡のランク

確認された遺跡をA・B・C段階に分類して遺跡の位置づけをした。

A……非常に重要な遺跡

B……かなり重要な遺跡

C……普通の遺跡

5. 調査にたずさわった調査員は次のとおりである。

岡　本　健　児　高知女子大学教授

廣　田　典　夫　高知ろう学校教諭

宅　間　一　之　高知県教育委員会文化振興課

角　谷　和　男　高知西高等学校教諭

鈴　木　省　一　早稲田大学学生

岡　本　桂　典　立正大学学生

井　本　葉　子　国学院大学学生

井　上　正　隆　高知大学学生

廣　田　佳　久　立正大学学生

川　上　芳太郎　立川御殿保存会会員

杉　本　正　喜　立川御殿保存会会員

I 埋蔵文化財に関するもの

番号	種類	名称	内容	所在地	ランク	面積
1	散布地	川奥遺跡	丘陵端部の緩い斜面上に立地した遺物包含地で現状は畠である。採集遺物は中世の土師質土器である。	大豊町立川 大字上名 小字川奥	C	10m×30m
2	古墓	刈谷墳墓	丘陵端部斜面を削平し作られた江戸時代の墓地で約40基の墓石が存在する。墓石の年号は延宝、寛政、文化、文政、文久等があり、この墓地が江戸時代全般にわたり築造されたことがわかる。また墓石が40基にわたることや、方形の石を長方形の形にした古墓が多い。(土地の人達は庄屋の墓地と伝えている。)	大豊町立川 大字刈谷	B	40m×20m
3	散布地	コヲサキ遺跡	立川川に面した河岸段丘上に立地した遺物包含地である。遺物は畠の間の狭い路上で確認され、平安期の須恵器片と江戸初頭の古備前焼の破片である。 古代からこの地が土佐から都への交通の要所であったことと、平安期の須恵器片が散布していたことを考えあわせると、この地は丹治川駅、もしくはこれに関連した遺跡である可能性がつよい。 付金であるかもしれないが、コヲサキのコヲは国府であり、サキはその出先ということも考えられ注目すべき遺跡である。	大豊町 刈谷コヲサキ	B	30m×30m
4	城跡	和田山城	立川御殿西方、標高約500メートルの寺田山山頂に所在する。皆山集、南路志等には立川城とされるが地元では寺田山城と伝えられている。頂上は約60m ² の広さに削平され付近に空塹の遺構らしいものも存在すると伝えられてはいるが城跡への道は崩壊し、かつ急峻なため登頂は困難である。城主は川井氏といわれるが城に関する伝説等は何も存在しない。	大豊町 和田山	B	20m×30m

番類	種類	名 称	内 容	所 在 地	ランク	面 積
5	散 布 地	下西遺跡	県道大豊川之江線よりやや上った傾斜面に立地し現状は細である。採集遺物は土師質土器片である。	大豊町柳瀬 下西	C	10m×10m
6	散布地及び古墓	堂ナル遺跡	柳瀬部落の南より、立川にかかる柳瀬橋と現在の県道との間のゆるやかな傾斜をもつ畠地に立地した遺物包含地である。採集遺物は中世の土師質土器片である。なお、この地には現在も2~3基の古墓が残存しており、「堂ナロ」の地名や伝承から中世に堂のあった可能性がつよい。	大豊町立川 下名1292	C	50m×20m
7	古 墓	下名墳墓	堂ナル遺跡から500~600m南、標高約300mのところにこの付近一帯の開拓者の墓と伝えられる2基の古墓が存在する。墓の形態は1m×2mの長方形積石式でこの地方の地方的特色がつよくあらわれたものである。	大豊町立川 下名	C	5m×5m
8	散 布 地	野竹遺跡	立川川に面した低平な河岸段丘上に立地した遺物包含地であり、現状は桑畑、水田、畑である。遺物は中世の土師質土器片である。	大豊町川口 野竹	C	100m×300m
9	墳 墓	川口墳墓	丘陵端部斜面を2段に削平して、上段に6基、下段に7基の墓石が存在する。墓石に刻まれた年号は寛政7年、元治元年等で江戸末期のものである。上段は秋山家一族のものであるが、下段は墓石が磨耗著しく判明しない。	大豊町川口	C	5m×5m

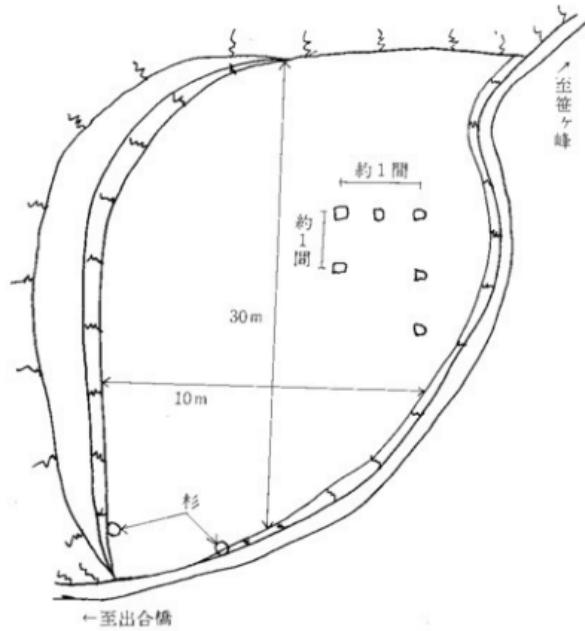
II 交通に関するもの (○印は埋蔵文化財の性格をもつもの)

番号	種類名称	内 容	所 在 地	ランク	面 積
A	椿木	<p>笠ヶ峰頂上（県境）の参勤道、東側に40センチ角、高さ4メートルの桧と推定される角柱が存在する。県境を意味するものか、その用途は不明であるが、土地の人口に椿木とよばれ頂上のシンボルとして親しまれている。3分の1程度は朽ちており建立時を示す文字等は存在しない。</p>	笠ヶ峯山頂	C	1m×1m
⑤	笠ヶ峰頂上付近における階段状遺構	<p>笠ヶ峰頂上付近の参勤道の左右に、それぞれ7m×20m程度の平坦面が7～8段、階段状に存在する。現在は雑木林である。</p> <p>「参勤交代時の土佐領における最後の休息所として使用され、従者の身分により上段から順次下段にその場所が定められていた」（杉本正喜氏談）</p> <p>調査の必要がある遺構であり、調査によっては埋蔵文化財としての性格をもつものとなる。</p>	笠ヶ峯山頂	C	50m×30m
◎	木番所跡	<p>標高約770メートル地点、参勤道の西側の平坦地に所在する。藩政期土佐領最後の番所が設けられた地点であり、土佐、伊予間における抜荷等の監視のため設置されたものである。建造物は明治初年に失なわれ（川上芳太郎氏談）現在は放置されている。平坦部のほぼ中央部に約1間間かくに40cm×30cm大の礎石6個を確認した。なお、平坦部入口（番所入口と推定）左右に樹齢200年と推定される杉の大木が存在する。</p> <p>番所跡とし埋蔵文化財としての価値もある。発掘調査すればその跡が出土する可能性がある。（第I図）</p>		B	30m×10m

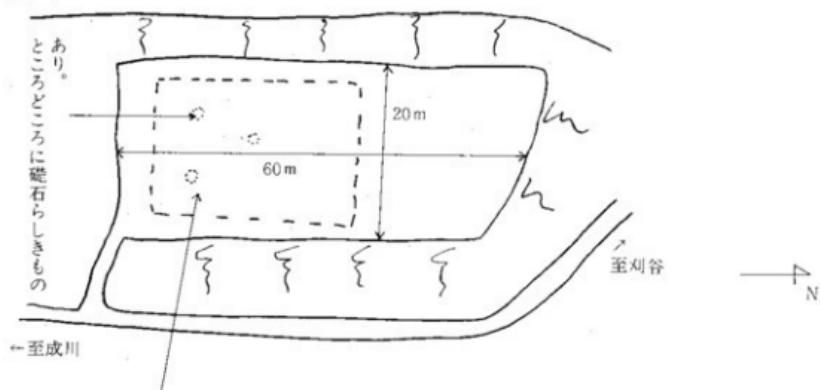
番号	種類名称	内 容	所 在 地	ランク	面 機
①	立 川 御 殿	<p>標高約500メートル、出合橋より約200メートル立川御殿よりに所在する。三段の平坦地があり各段ごとに石積みがみられる。下段は約20メートル×10メートル、そこより1メートル上に約10メートル×8メートル、更に1メートル上に8メートル×5メートルほどの階段状を呈している。現在は各段とも植木がなされている。岐上段後方には樹令100年をこすとみられる桧の大木があり、その後方遠く北山越の頂上巣ヶ峰をのぞむことができる。</p> <p>発掘調査を実施すれば、埋蔵文化財＝遺構＝の発見される可能性がある。</p>		B	20m×30m
E	立 川 御 殿	<p>龍立よりおよそ3キロ立川御殿よりで、現在の和田部落とは立川川をはさんだ対岸地点に所在する。現在はミツマタ森であり、遺構の確認はできないが参勤道より、やさがった河岸段丘上の平坦地部分が荷宿にあたると伝えられている。</p>		C	20m×30m
F	立 川 御 殿 (旧立川藩所書院)	<p>土佐藩主參勤交代道の土佐最後の本陣(宿舎)で寛政年間の建立といわれている。明治4年に鈴木家が買いとり、昭和48年に大豊町が購入し49年に国の重要文化財に指定された。</p> <p>明治のはじめに一部改造され、規模は背の半分になっているが、なお217平方メートルもあり、カヤふきの寄棟造りで書院座敷をもつてとした建物である。18世紀末の地方山間部に残る書院造の数少ない遺構で史跡としても重要な価値がある。現在140名の会員をもつ立川御殿保存会が保存に努力している。</p>		A	50m×50m

番号	種類名称	内 容	所在 地	ランク	面 積
G	坊屋敷	立川御殿に付随した遺構であると思われるがその性格等は不明である。坊屋敷という地名、御殿のうら山の墓地、及び御殿に接近して魔界のこること等を考えあわせると坊屋敷は立川御殿に何らかの関連をもつ僧侶の住んだ屋敷跡ではなかろうか。		C	15m×15m
H	警護屋跡	参勤道沿いの傾斜地を削り100mほどの平坦地をつくり、前後に石垣を築いている。現在は雑草がしげり、わずかに礎石らしい石が点在している。昭和初年ごろまで江戸期建立の建物も存在(杉本正喜氏談)し、参勤交代時藩主に従った侍達の宿所警護屋とよばれている。発掘すれば礎石等が出土する可能性があり、埋蔵文化財としての性格ももつ地点である。(第II図)		C	20m×60m
I	常夜燈	高さ2メートル、幅4メートルの石造上に築造されている。石垣には、幅1メートルで4段の階段がある。またこの石垣には薄平な石が使用され、街道への土砂流出を防いでいる。 常夜燈は高さ2.5メートルで笠の部分に「金」の文字が刻まれている。(金刀比羅神社関係だろう)竿部に天保七年十月十日(前面)施主、利右工門、イマヤ、平野、二ヶ村、惣中(裏面)とあり、左横に「常夜燈」の刻文がある。		C	5m×5m
J	柳瀬休息所跡	柳瀬地区の河岸段丘上に所在する。現状は民家の畠となり、遺構は擾乱されている。旧来の礎石を一部確認することができた。それによると休息所は7間×4間程の規模と推定できる。発掘調査をすれば遺構の発見ができる可能性があり埋蔵文化財としての性格ももつ地点である。		C	14m×8m

(図I)



(図II)



官道・参勤道について

古くから「北山越え」といわれ、四国山地を横断する道がある。今回の調査はこの北山越えの、大豊町川口南付近から、県境篠ヶ峯（標高1027メートル）の区間であった。

土佐への官道は、和銅4年（711）の制では、都から紀伊、淡路、阿波、讃岐、伊予、宇和島を経由して土佐に入り、幡多から国府へはいったようである。しかしこの官道はあまりにも遠いため、養老2年（718）には国司の奏請により阿波から海岸を通る新道がひらかれている。延喜16年（797）には、「廢阿波国駅家口。伊予国十一。土佐国十二。新置土佐国吾椅舟川二駅。」（日本後紀、卷五）とあり、いわゆる北山越えの新道が開設されている。吾椅は現本山村であり、舟川は丹治川で大豊町立川である。

（註）

さらに日本後紀は、「令土左国帶駅路郡。加置伝馬五疋。以新聞之路山谷峻深也」と伝えている。ともあれこの北山越えの新設は、都への距離を短縮したとしても、あまりにも峻深なため通行に渋難をきわめたであろうし、また次第に記録から遠ざかってくる。

近世になり参勤道として再びこの道が脚光をあびてくる。もともと参勤は海路によるのが正規であったが、海路は天候などの影響で出費が増大し、次第に陸路へ変更されていったようである。この陸路が古代からの官道「北山越え」を利用したわけである。享保3年（1718）、6代藩主山内豊隆が陸路参勤の最初と伝えられている。以来城下から布師田、穴内、本山、川口から立川街道を経て篠ヶ峯から伊予への道が参勤道としてにぎわうことになった。もちろん一般旅人もこれにならってこの道を利用し、まさに当代土佐からの幹道となったわけである。しかし参勤については官用輸送人夫1,000人、人夫6,000人が沿道整備や荷物運搬などに動員された記事に接すれば、沿道住民を含む多くの人々の労苦を想わざるを得ない。

また街道にはつきものの関所であるが、土佐では「道番所」とよばれ、享保の頃の記録では、領内関所81箇所、うち国境に63箇所と記され、大小あわせ四国山地を越え他国への官公道63筋が存在したようである。この数は当時の交通路の発達状況を知るうえで貴重であるとともに、番所における厳重な通行の取締りの実態を知る史料でもある。それらの関所のなかでも、立川番所は首位であり、現在でも参勤道沿いにこれに関する史跡が残存し、厳しい取締りの逸話は里人たちによって伝えられている。

今回の調査により、官道、参勤道に関する史跡は10箇所確認できた。これらの道は位置としてはほとんど古来の場所と変わってはいないが、その形態は時代とともに変化している部分が多い。

川口南付近から柳瀬休息所付近までは、すでに林道や付近住民の生活道として整備され旧道の姿をほとんど残していない。

柳瀬から細野までは、周囲の山が立川川にせまり、平坦地は皆無で、道は急斜面をきりとりつくらされている。街道として確認できる道幅は狭いところで0.3~0.5メートル。広いところで1.5~2.0メートルあり、途中に所在する天保年間の常夜燈とともに当時の姿をとどめている。

成川から刈谷までは全区間ほとんど1メートル内外の道幅で残存し、上名道（カミメヨウドウ）の名で現在も利用されている。

立川番所から川奥橋までは、平坦な道ではあるが用水路工事で旧道は削りとられ、道幅は0.7メートル~1メートルしか残存しない。川奥橋から標高差100メートル程の急傾斜をのぼりつめると、そこから出合橋までは平坦な道である。しかしこの道は旧軍隊により拡幅された道であり、参勤道としての旧態をみることはできない。

出合橋から 笹ヶ峯までは、ほとんど1メートル内外の道幅でかつ急傾斜であるがほぼ参勤道としての姿をとどめている。ただ一部昭和30年ごろの電話用ケーブル敷設工事による護岸や敷石で街道の姿が破壊された部分もある。

古くから「新開之路山谷峻深」とはされているが、「ソロバン坂」などづら折れの急傾斜をいかにして参勤の大名達が通過したか、想像に絶する輸送夫たちの苦労が胸にせまつた踏査であった。

なお、今回調査した地域が、古代官道と駅の廃止後は常住の集落がなかったか平安時代の須恵器片が立川（丹治川駅関係の遺跡）で発見されている他は、古代、中世前半に位置する遺物の発見は皆無であった。ただ中世後半（室町時代）に入って小さな集落が形成されたか、2~3の当時の土師式土器の破片が発見されていることをつけ加えてこの稿の結びとしたい。

鉢 舟川は『延喜兵部式』では丹治川となっているし、『和名類聚抄』（高山寺本）では治川としている。舟川は丹川の誤字とみて、丹治川（立川）と考えてよいだろう。

埋蔵文化財に 関するもの

1 川奥遺跡

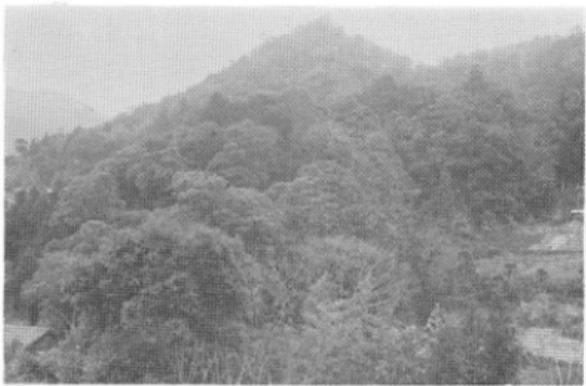


2 刘谷墳墓



3 コフサキ遺跡





4 和田山城



5 下西遺跡



6 堂ナル遺跡

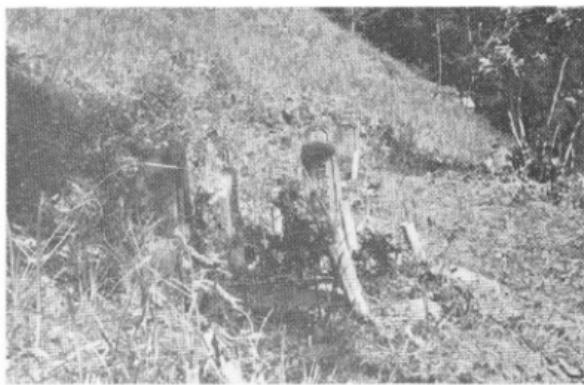
7 下名墳墓



8 野竹遺跡



9 川口墳墓



交 通 に 関 す る も の

(○印は埋蔵文化財の性格をもつもの)

A 棒 木



③ 篠ヶ峰頂上付近における階段状遺構



◎木番所跡



◎籠立



E 荷宿



F 立川御殿



G 坊屋敷





⑩ 警護屋跡



I 常夜燈



丁 柳源休息所跡

歴史の道点描

篠ヶ峰～立川間



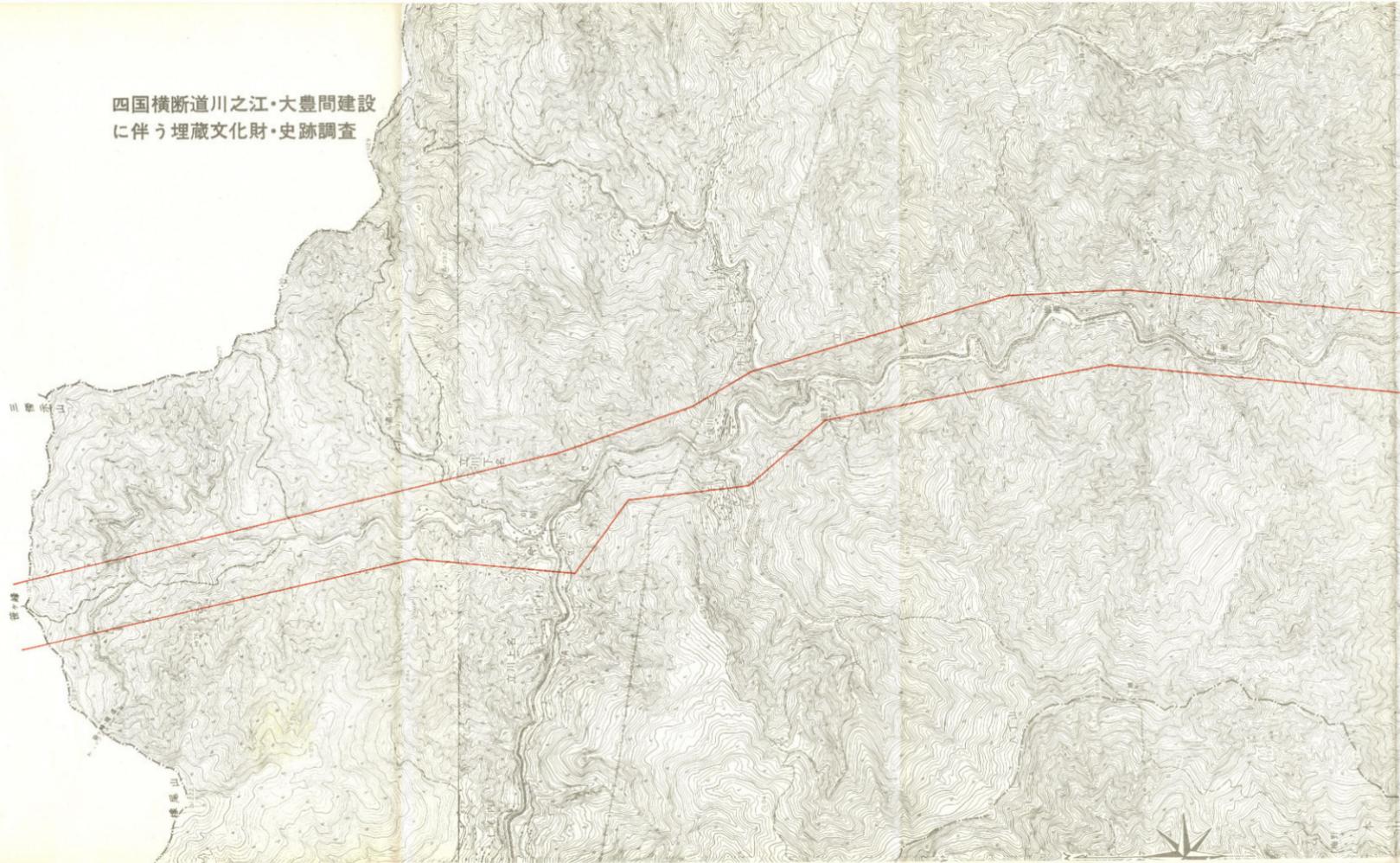


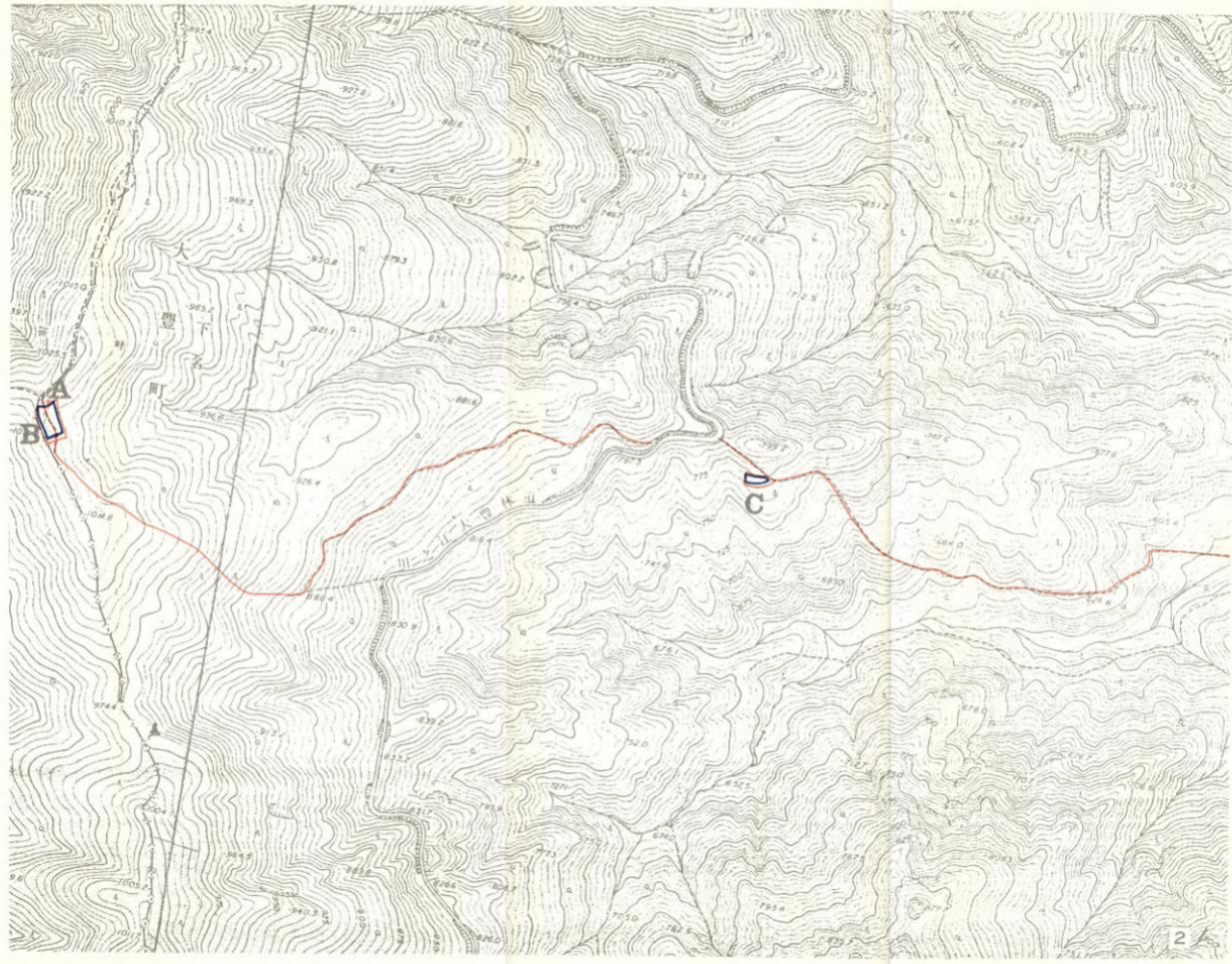
立川～柳瀬間

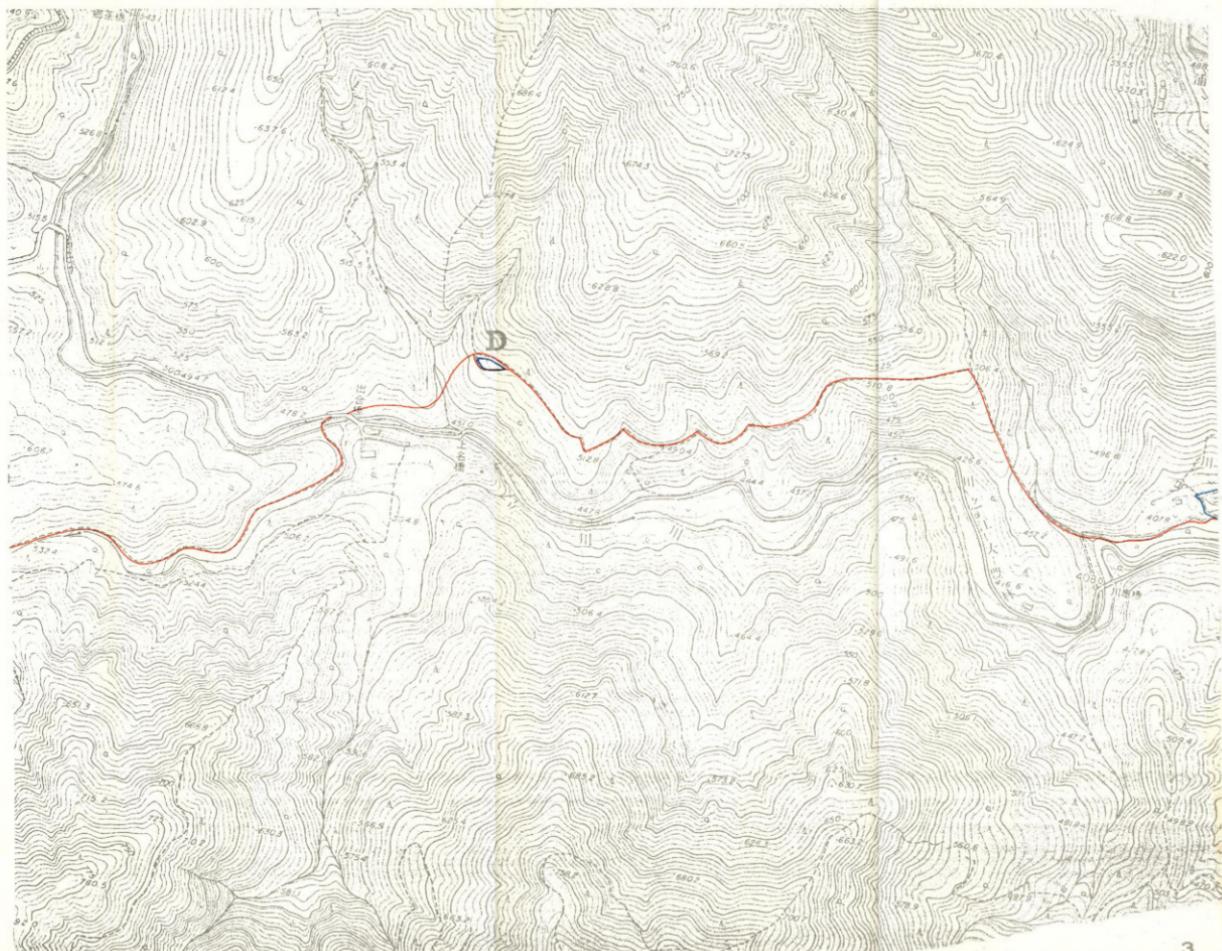


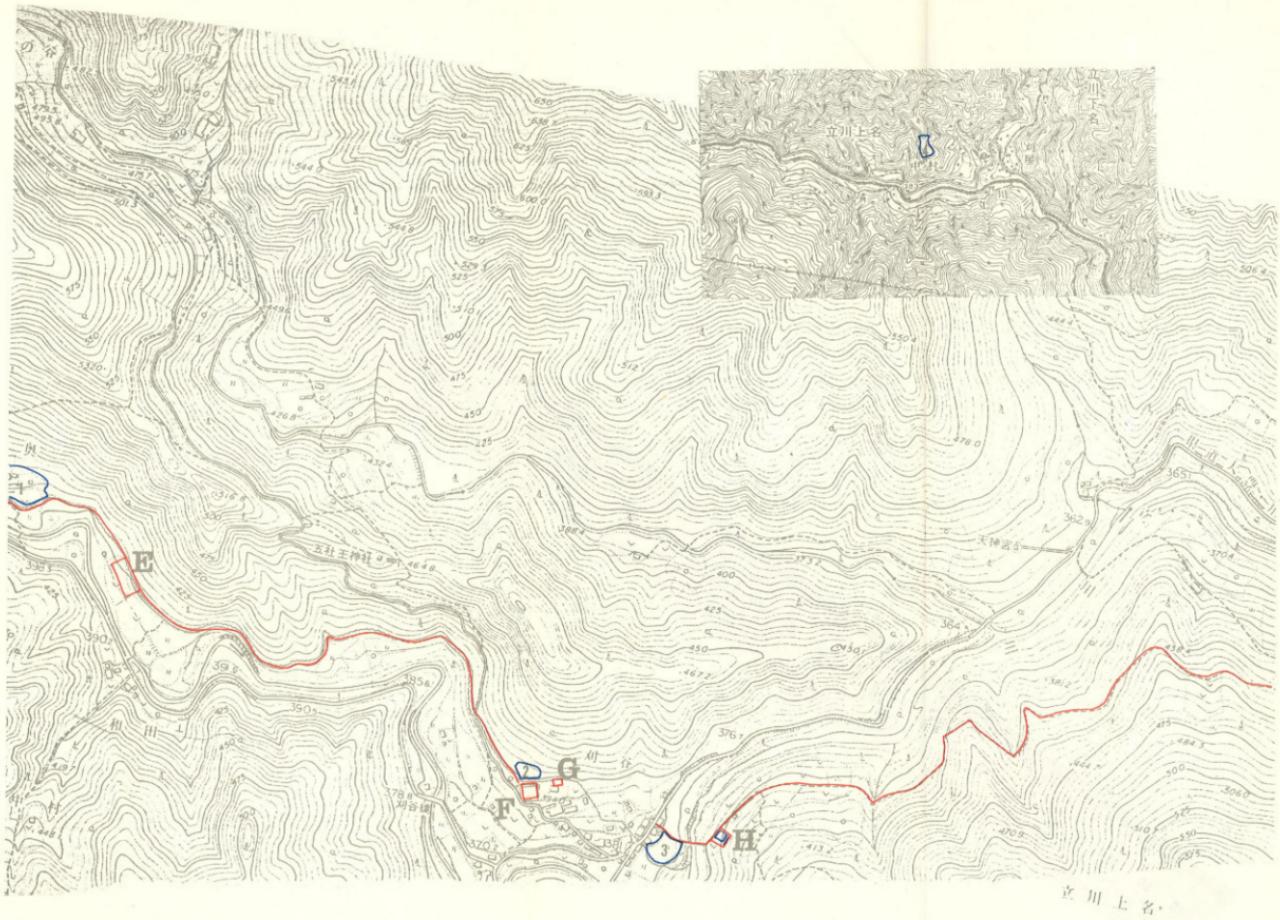


四国横断道川之江・大豊間建設
に伴う埋蔵文化財・史跡調査

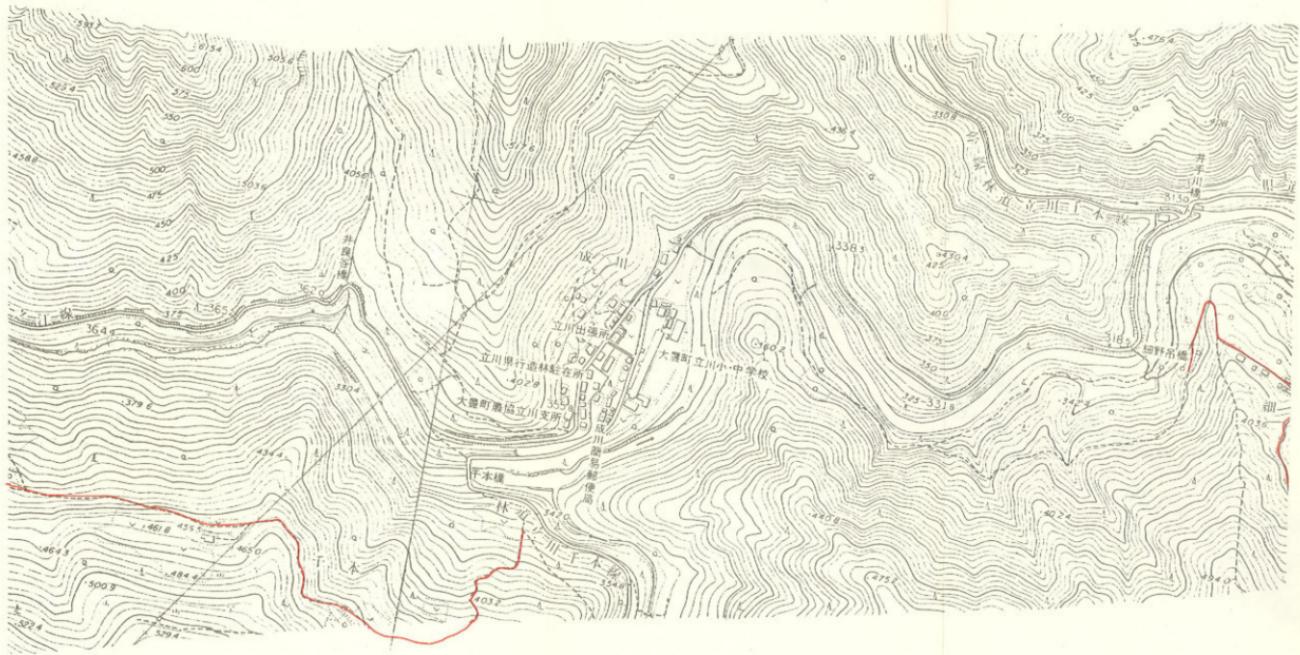








立川上名



下

